

自閉症児の指導過程に関する研究 (2)

—T-CLAC による追跡—

池 弘子・小林 重雄・太田千鶴子・伊藤 健次

本研究は、筑波大知能障害研究室および東京教育大特殊教育臨床研究室における自閉症児の治療教育活動において経過を追っている症例を取り上げ、その変容過程を検討しようとするものである。

変容過程を把握するために、小林 (1973) によって報告された山形式 CLAC を一部改訂し、自閉症状の改善過程と身辺自立、運動能力、表現能力などを中心とした発達過程を含む24項目について5段階評価でチェックする筑波式 CLAC (以下 T-CLAC とする) を主として使用することにした。

T-CLAC で24項目すべてについて幼児期に5の評価を得ていれば、小学校入学にあたって、affective contact にある程度の問題は残るとしても、社会的、対人的な機能および学習集団への適応に重大な問題を残さず普通学級に導入可能となるであろう。

方法

(1) 被験者

自閉症と診断され、筑波大および東京教育大のいずれかにおいて週1時間ないし2時間の治療教育的取り扱いをうけている児童6名である。

性別および初診時の年齢は次の通りである。

- | | | | |
|------|-------|---|-------|
| 症例 1 | H. M. | ♂ | 3才8か月 |
| 症例 2 | H. H. | ♀ | 3才9か月 |
| 症例 3 | M. I. | ♂ | 4才8か月 |
| 症例 4 | T. S. | ♂ | 4才9か月 |
| 症例 5 | H. K. | ♂ | 6才0か月 |
| 症例 6 | N. K. | ♂ | 7才1か月 |

(2) 方法

T-CLAC を初診時および訓練経過において2回、計3回適用し評価を行なう。

初診時より行動療法的アプローチとして構成された治療教育プログラムに基づいて指導が進められたが、導入期の一般的プログラムは Fig. 1 に示す通りである。

結果 (症例研究)

初診時のT-CLACによる評価をCLAC-1、第2回目の評価をCLAC-2、第3回目の評価をCLAC-3としてpsychogramに表わし、CLAC-1からCLAC-2、CLAC-2からCLAC-3の2つの期間に分けて、訓練経過と主な行動の変化を追った。それとともに、T-CLACによる評価の有効性と問題点を考えるために、訓練者が重要としてとらえた変化でCLACには表われない変化についても言及した。

症例 1 H. M.¹⁾ ♂ S. 46. 12. 27. 生

<生育歴>

妊娠中：異常なし。

出産時：早期破水のため帝王切開で出産。多指症であった。

生下時体重：2,900グラム。

始歩：10か月。

出産直後、多指症の手術を受けている。「泣かない、おとなしい子ども」で、2才頃まで音らしいものを出さず、ころんでも泣かず全く平気であった。自分勝手なひとり遊びが多かった。幼稚園は3才4か月で3年保育の最年少のクラスに入園し、週3日間9時から10時30分まで在園している。

<初診時 (S. 50. 9.) の状態>

Fig. 2 の CLAC-1 参照。音声は非常に緊張の強い、「ウー」という無意味音声で、頻度も極めて低く、ほとんど無発声状態といえた。そのほか、

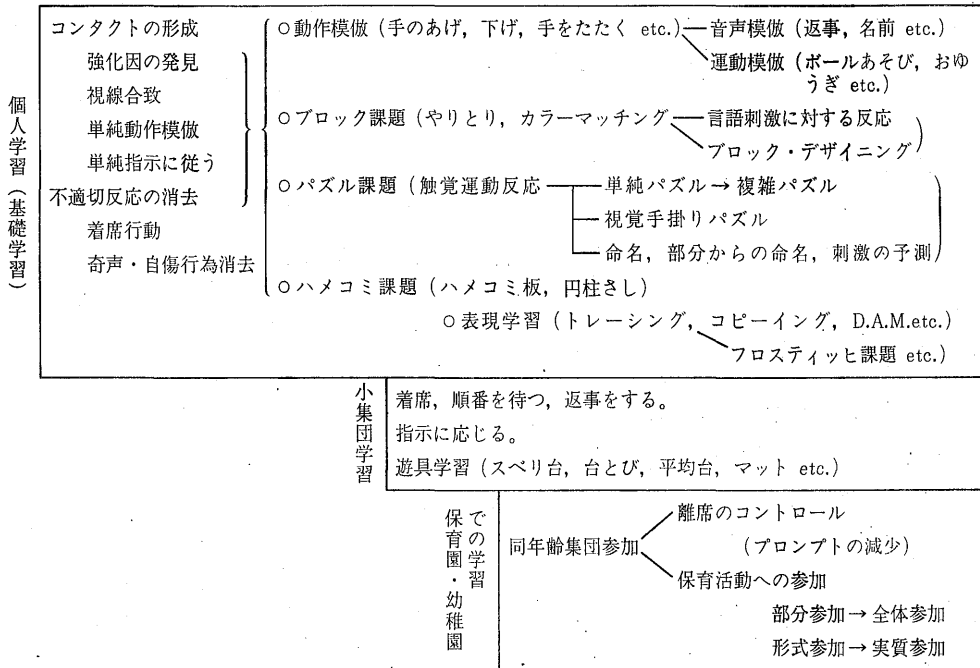


Fig. 1 自閉症幼児の幼稚園入園時期の治療教育プログラム

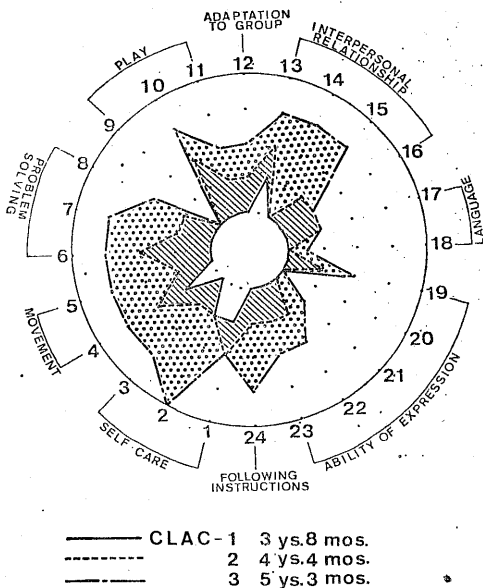


Fig. 2 T-CLAC PSYCHOGRAM CASE1 H. M.

動きは鈍いが常に動き回っている, スイッチ, 水道の蛇口に固執するなどの行動が認められた。園内では全く指示に従わず動き回るため, 目が離せないという状況であった。

<CLAC-1 から CLAC-2 までの経過 (S. 50. 9. ~ S. 51. 4.)>

1. 訓練経過及び主な行動の変化 (以下は番号のみで示す)

不適応行動の除去, 発声量の増加, 言語指示に従うことを目標として訓練を行なった。

その結果, 一定時間着席できるようになった, 訓練者に注意を向けられるようになった, 簡単な指示に従えるようになった, といった大きな変化が認められたが, 発声だけは相変わらず, 「ワー」という緊張を伴った音が時折みられるだけであった。そこで, 50年11月から音声模倣訓練を開始した結果, 急激に発声量が増加した。また, 発声自体が緊張のない明瞭なものとなった。

2. 訓練者がとらえた行動の変化と CLAC に表われた行動の変化（以下は番号のみで示す）

発声以外の変化は CLAC によく表われている。しかし、この期間の大変大きな変化である発声量の増加は CLAC には表われず段階 1 に止まっている。

<CLAC-2 から CLAC-3 までの経過(S. 51. 5. ~ S. 52. 3.)>

1. 前期間の訓練結果が良好であったので、音声模倣訓練を継続しながら、具体物・色・形の弁別、トレーシングを課題として行なった。

その結果、指示に従って課題に積極的に取り組み遂行することができる、家庭で母親の模倣をすることが多くなった、といった変化がみられている。発声量も、質的な変化はよく認められないが、増加している。

2. この期間における本児の着実な変化のようすは CLAC によく表われている。しかし、前期間と同様に、発声量が増加して広がりをもちつつ伸びてきているようすが、CLAC には表われてきておらず、CLAC ではとらえきれない面である。

症例 2 H. H. ♀ S. 46. 12. 8. 生

<生育歴>

妊娠中：2~3 か月頃より性器出血があり、黄体ホルモンを10か月まで服用。入退院を繰り返す。

出産時：帝王切開。

生下時体重：3,400グラム。

始歩：10か月。

始語：1才2か月。その後、レパトリーは拡大せず3才でコマースを言う程度。

手のかからない、おとなしい子であった。3才で幼稚園に入園、その年の9月、集団適応が悪く、先生の指示に従えないため、来所した。

<初診時(S. 50. 9.)の状態>

Fig. 3のCLAC-1 参照。時折、コマースを発すること以外自発的行動はみられず、課題自体に意味がなく、また外界の刺激も本児には意味がないようにボーとしていることが多かった。

<CLAC-1 から CLAC-2 までの経過(S. 50. 9. ~ S. 52. 3.)>

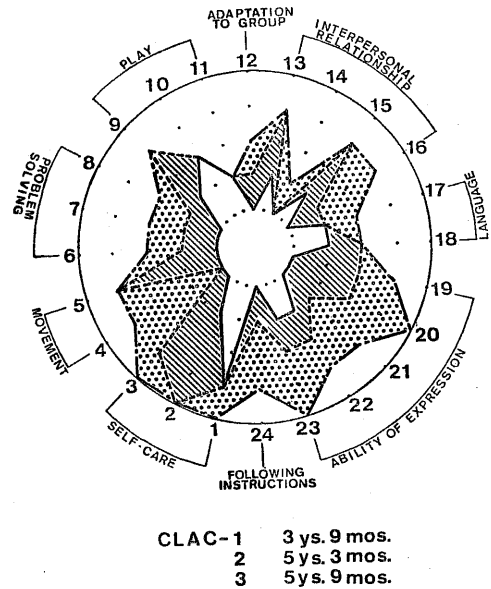


Fig. 3 T-CLAC PSYCHOGRAM CASE 2 H. H.

1. ピクチャー・パズル、円柱さし、人物画はプロンプトなしでできるようになった。弁別は簡単な色、形、大小と、具体物の絵カードが可能となり、ボール運動、動作模倣は訓練者を意識して行なうようになった。このような課題を通じて着席が可能となり、好きな課題の時は集中するようになった。視線は時々合い、ボーとすることが少なくなった。独語は減少したがエコラリアが目立つようになった。また、突然笑い出すことがあり、動作の遅さが目立つようになった。

2. ほぼCLACと一致するが、本児の問題点となった動作の遅さ（知覚と action の結合の悪さ）は、CLACの項目 4, 5 または 24 などでも表われないところである。

<CLAC-2 から CLAC-3 までの経過(S. 52. 4. ~ S. 52. 9.)>

1. 文字のトレーシング、コピーイングがプロンプトなしででき、ひらがな、かたかなが読めるようになった。色、形、大きさという多次元での分類、用途による分類ができるようになり、数は1から5までの1対1対応ができるようになった。自発的なことばはほとんどないが、応答言語はしばしばみられる。

2. 本児の応答言語というのは、訓練者が問うと答えられることで、本児からの問いかけはまったくなくない。自発的な言語とは、本児が自ら問いかけたり、話したりすることばのことを指すと思われるが、CLACの項目17ではその点が不明瞭である。

症例3 M. I. ♂ S.46. 1.14. 生

<生育歴>

妊娠中及び出産時：異常なし。

生下時体重：2,900グラム。

始歩：1才1か月。

喃語はほとんどなく、泣かない、手のかからない子であった。4才2か月より幼稚園に通園している。

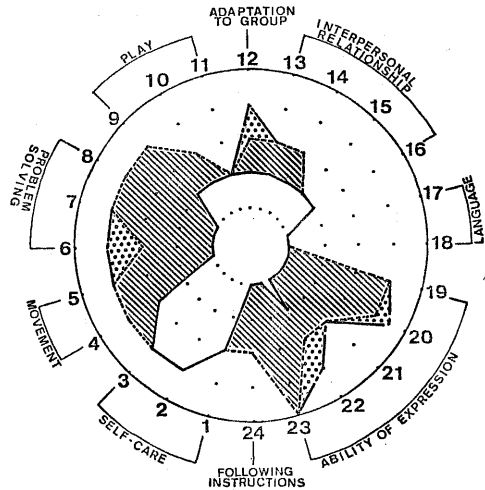
<初診時（S.50.10.）の状態>

Fig. 4のCLAC-1参照。母子分離可能。音声は緊張した無意味音声のみで、理解言語はなかった。幼稚園で手のあいた者ができるだけ付き添って指示に従わせるように努め、入園から初診までの5か月間で、身辺自立は全体に1段階、集団への適応も1段階上がっている。

<CLAC-1 からCLAC-2までの経過（S.50.10.～S.51.11.）>

1. 学習態度の学習、色や物のマッチング、ピクチャー・パズル、トレーニング、円柱さし、動作模倣、口形模倣などは、少しずつ伸びていったが、発声訓練及び言語刺激による弁別課題には、全く進歩を示さなかった。訓練経過から聴覚的な面よりも視覚的な面が優位であることがわかってきたので、弁別課題に文字を導入した結果、文字による弁別は可能となった。この後、課題に対する態度が積極的になり、高い緊張した音声之急減して、時々、喃語様の音声を出すようになった。書字は10文字程度のコピーイングが可能となった。なお、9月（5才8か月）に行なった大脇式知能検査は上限（5才11か月）までできた。

2. 本児は、視覚的な面と聴覚的な面の伸びの差が大きい、CLACではこのような分け方をしていないので、ひとつひとつの項目をみなければこれはわからない。弁別能力は段階4だが、マッチングによるもので、言語刺激による弁別であれば段階1となる。また、喃語様の発声がありはじ



CLAC-1	4 ys. 8 mos.
2	5 ys. 10 mos.
3	6 ys. 6 mos.

Fig. 4 T-CLAC PSYCHOGRAM CASE 3 M. I.

めたことは本児の言語面にとって大きな変化であったが、段階では変化はない。

本児は、自閉的傾向とともに発達性の感覚性先語症も疑われる特異な例であり、このことが本児にとっての重要な変化をCLACではとらえられなくしているようである。

<CLAC-2 からCLAC-3までの経過（S.51.12.～S.52.7.）>

1. 文字の面では、まだ名詞一語の段階であるが、絵カードをみてその名前を書くことができるようになった（15程度）。音声面では、確実ではないが口形をみて10前後の音節の音声模倣ができるようになった。単語としては「ママ」が模倣できるのみで実用には至っていない。家庭で話したそりに母親の顔をのぞき込み、音声を出すことが多くなっている。また、言語刺激による弁別では進歩はみられていないが、母親の話しかけに注意を向けるようになってきている。数は1から4までほぼわかるようになった。また、12月（5才10か月）に行なったグッドイナフ人物画テストではM. A. 5才1か月という結果がでた。

自閉的傾向の目立った改善はなく、この傾向は、聴覚的の刺激の弁別ができないためだけでなく、

乳児期から自閉的な面をもっていたためとも考えられる。

また、52年4月から就学であったが、1年間で大幅な伸びは期待できないものの小学校より幼稚園が適切であろうとの判断から、1年間の就学猶予となった。

2. 言語面で音声模倣が可能となり、本児にとっては大きな変化であるが、CLACではこの変化は表われない。その他は特記すべき進歩はなく、CLACにおける大きな変化もない。しかし、段階は上がらなくてもその段階での広がりがあり、全体的な伸びは感じられる。課題場面における集中時間が長くなった点、家庭で自発的に実物と絵のマッチングをしたり、実物をみて絵と文字を書いたりするようになった点、話したい様子で音声を出したり母親の話しかけに対して注意を向けるようになった点などである。

症例4 T. S. ♂ S. 46. 9. 18. 生

<生育歴>

妊娠中：異常なし。

出産時：陣痛開始より3日めに吸引分娩。

生下時体重：3,760グラム。

始歩：11か月。

始語：1才半。パパ、ママ。

その後、少しずつではあるが単語のレパトリーは拡大した。手のかからない、おとなしい子であった。4才の時、幼稚園に入園したが、集団生活に適應できないため来所した。

<初診時（S. 51. 6.）の状態>

Fig. 5 の CLAC-1 参照。CLAC にも表われているように、特に、集団適應能力が低かった。課題解決場面では、母子分離ができず、泣きあばれた。興味のある課題には注目できたが、その集中時間は非常に短かった。ことばは、エコラリアと独語がほとんどであり、理解語はかなりあるようだったが、訓練者の指示に従おうとはしなかった。

<CLAC-1 から CLAC-2 までの経過（S. 51. 6. ～ S. 52. 3.）>

1. ピクチャー・パズル、円柱さしは簡単にこなすようになり、弁別では、受け渡しの行動が確立し、色・形・大小・上下など複雑なものも可能

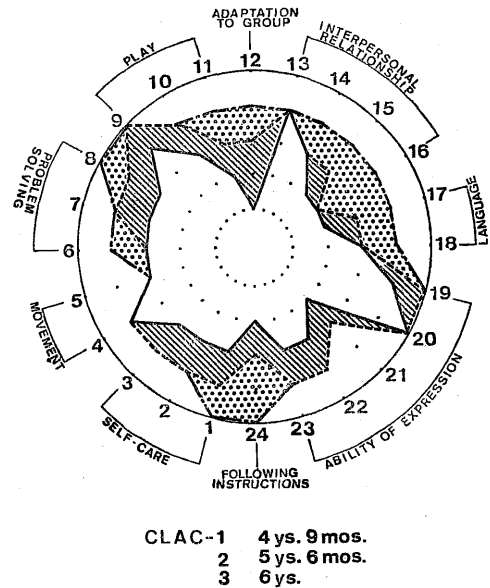


Fig. 5 T-CLAC PSYCHOGRAM CASE 4 T. S.

となった。理解語もふえ、訓練者の指示にはほとんど従えるようになった。エコラリア、独語も減少した。しかし、運動コントロールが悪く、トレーニングやボール投げ、さらに細かい手の動きを伴う動作ができなかった。ボール運動やあいさつなどは相手を意識したものではなく、パタンとして覚えこまれたものをはき出すように行なわれていた。このことは、言語面でもっとも顕著に表われており、言い方が変わったり、慣れない助詞、助動詞などがはいると理解できなかった。

2. 課題のレパトリーが拡大したことは、CLACにも表われている。しかし、ひとつの課題の集中時間が延びたこと、いやな課題でも、なげ出したりせず強制されれば最後までできるようになったことは、本児にとって大きな進歩であるが、CLACには表われていない。幼稚園では、着席が可能となり集団にもかなり適應できるようになったことと、誘われれば友達とも遊べるようになったことなどは CLAC と一致する。しかし、本児の問題点として、運動コントロールが悪く、トレースすることはできるが、線からはみ出したり、終点を意識しているが止めることができなかったりすることと、パタン化したものでない理

解することができないなどは、CLAC に表われていないところである。

<CLAC-2からCLAC-3までの経過 (S.51.4.~S.52.9.)>

1. 数は1桁のたし算、ひき算は簡単にこなし、簡単な文章題も解けるようになった。訓練者の言ったことばが文字にでき、また、文章も意味を理解して読めるようになった。リラクゼーション訓練を通して運動レパートリーが拡大し、トレーニングが確実になり、自発語も増え、応答はほとんどが適切になった。

2. 主な行動変容は、小集団場面で友達を意識し相手になったり、訓練者に話しかけたりするなど自発的な行動が増加したことで、これはCLACと一致する。しかし、個人セッション、小集団セッションでは訓練者の指示によく従えるのだが、幼稚園のような大集団になると先生の指示に従えず、なお問題行動を残していることはCLACに表われていない。また、トレーニングが確実にできるようになったことは、運動コントロールを促進し、他の細かい動作を改善したと考えられ、本児にとって大きな進歩であるが、これもCLACに表われていない。

症例5 H. K. ♂ S.45.4.27. 生

<生育歴>

妊娠中及び出産時：異常なし。

生下時体重：3,250グラム。

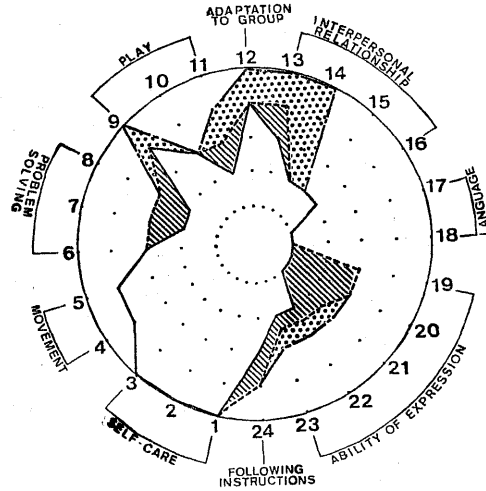
始歩：1才2か月。

人を回避する傾向は少なかったが、人に対する積極的接近は少なく、人見知りもなかった。4才近くなって幼稚園に入園。3年保育の自閉症児のみのクラスに入る。6才になって3才児の普通児クラスに配属。クラスへの適応は良好である。

<初診時 (S.51.5.) の状態>

Fig. 6 の CLAC-1 参照。幼稚園でかなり厳しい訓練をうけていたためか身辺自立はすべて段階5であり、集団への適応もよく、対人関係も改善していた。言語面での遅れが、理解・表現面とも目立ち、理解は語調により少し可能、また、表現はいやな場面で緊張した音声をだす程度であった。動作模倣、口形模倣は可能であった。

<CLAC-1からCLAC-2までの経過 (S.51.



CLAC-1 6 ys.
2 6 ys. 10 mos.
3 7 ys. 3 mos.

Fig. 6 T-CLAC PSYCHOGRAM CASE 5 H.K.

5.~S.52.2.)>

1. 言語の理解面を伸ばすために絵カードのポイントイング、表現面では音声模倣を行なった。ポイントイングは20程度の名詞が可能となり、音声模倣は母音と両唇音が可能となったが、口形をみせなければできなかった。また、文字は線のトレーニングから文字のコピーイングまで進んだ。51年12月(6才7か月)に行なったグッドイナイフ人物画テストでは、M. A. 4才1か月という結果がでた。

2. 全体に少し落ち着き、伸びた傾向はCLACに表われている。本児は初診時には自閉的傾向はかなり改善されており、言語面の問題が大きかった。訓練により、理解面は伸びたが、CLACの「言語」には理解面がないため、これはCLACには表われない。表現面にしても、音声模倣は可能となったが、CLACではやはり段階1であり、この変化はCLACではとらえられない。

<CLAC-2からCLAC-3までの経過 (S.52.3.~S.52.7.)>

1. 普通学級は少し無理と思われたが、母親の強い希望により普通学級に籍をおき、週3日は情緒障害児学級に通級している。訓練では、CLAC

-1 から CLAC-2 の期間の課題を延長した課題を行なったが、この時期は休みが多く4度訓練を行なったのみである。しかし、情緒障害児学級でも同じような課題を行なっている。普通学級での適応はいいが、勉強面では全くついていけない状態である。

2. CLACに表われた通り、訓練場面での変化はほとんど認められない。訓練場面での変化はCLAC から知ることができる。

症例6 N.K²⁾. ♂ S.43. 4.14. 生

<生育歴>

妊娠中：異常なし。

出産時：8か月の早産。

生下時体重：2,100グラム。

始歩：1才3か月。

一卵性双生児の弟として出産。兄は生下時体重1,900グラムで仮死状態で出産している。「おとなしい子」で、3才位まで兄弟間に差異は認められなかった。3才で「オートサン」「オカーサン」が、4才でエコラリアの発生が見られた。母親に付き添われて一年間幼稚園に通園。小学校は普通学級へ入学した。

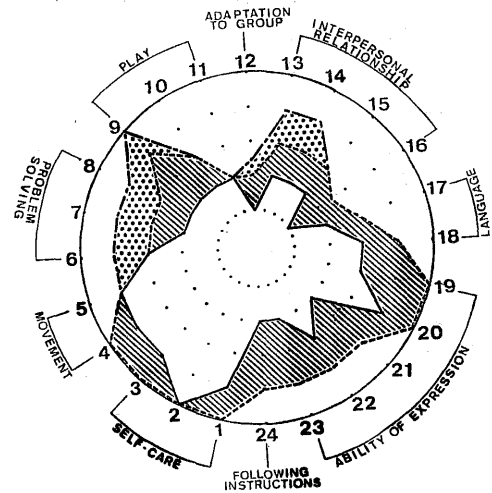
<初診時 (S.50. 5.) の状態>

Fig. 7 の CLAC-1 参照。学校内では常に動きまわり、かんしゃくを起こすと物を投げたり、蹴とばしたりして破壊し、大声や奇声を発する。対人関係は双生児の兄以外、同年齢の子どもには接近しない状況であった。ことばはエコラリアを主なものとしていた。

<CLAC-1 から CLAC-2 までの経過 (S.50 5.～S.51. 3)>

1. 不適切行動の除去と数の学習、ことばと文字の学習を中心に、大学での個人セッション、小学校の普通学級と心障学級 (S.50. 7. より通級) を利用しての個人セッション及び小集団 (3名) 学習を行なった。

その結果、訓練過程においては、無関係発言、着席時の姿勢の乱れ、離席などが急速に減少して行動面での改善がみられた一方、学習面でも2桁の筆算までと、ひらがな、かたかな、わずかの漢字の読みが可能となった。学校生活場面においても、グタグタした感じがキビキビした感じに変容



CLAC-1 7ys. 1mo.
2 7ys. 11mos.
3 9ys.

Fig. 7 T-CLAC PSYCHOGRAM CASE 6 N.K.

していると担当教師から報告されている。

2. 上記のような変化が CLAC に表われており、この期間の伸びが大きかったことがわかる。しかし、読んだものの記憶の保持、簡単なゲームのルールの理解がある程度可能になったこと、社会的強化で満足できるようになったことなど CLAC には表われない大きな変化も見られた。

<CLAC-2 から CLAC-3 までの経過 (S.51. 4.～S.52. 4.)>

1. 言語面では、会話ができるようになることを目的に、質問に適確に答える、助詞を正確に使う訓練を行なった。また、簡単な動詞、抽象的な名詞、代名詞をふやすこともあわせて訓練した。

そのほかの面として、数の学習では文章の内容を理解できるようになることも含めて文章題を行なった。また、表現能力を高めるため、描画の題材を拡大するといった訓練も行なった。

2. CLAC にも見られるように、この期間では指示に従うなど行動面での変化が著しい。このほか、特徴的な点として、言語面では、その時点を問題とした問いには答えられるが、時間をさかのぼっての「今日は学校で何をやったの」といった問いかけには答えられない、又、学習面では、文

章題を読解しての立式が困難であるといった点が問題となった。

本児にとって、大きな変化であるにもかかわらず CLAC に表われない面として、絵画面では、いろいろな種類のものが描けるようになったこと、一語文ではあるが内容が豊富になったことがあり、これらは、質的に充実して広がりをもつようになっていながら、同じ段階に止まっている。

考 察

T-CLAC が自閉症児の変容過程を 適確に 把握することができるのであれば、T-CLAC に表われるプロフィールは、治療場面、学校や幼稚園及び家庭における変容を敏感にそして正しく反映しなければならない。

自閉症候群は知能障害と同様の脳損傷タイプの発達障害による症状と過敏性症候群(小林, 1976)が混ざりあって、多様に複雑な構造を呈している。したがって、比較的簡単な形で、一人一人の自閉症児の状態像を直観的にとらえられようにすることは困難といえる。

1) T-CLAC の有効性

24項目、5段階という比較的ラフな評価表ではあるが長期にわたって follow している症例において、psychogram によって示されるプロフィールは外に向かって変化している。

この変化は治療教育の展開とマッチしており、訓練のステップが順調に進行している領域については大幅な変化がみられるが、ステップの進行に困難をきたしている領域については、T-CLAC の評価も変化していない。

2) T-CLAC の問題点

評価段階がラフであるというところから、訓練場面その他で明らかな変化がありながらプロフィールで変化がみられないことが起こる。

症例 1, 3, 5 において発声の仕方、発声量の増加が顕著に認められているにもかかわらず、T-CLAC では表われていない。

症例 3, 4, 6 において、運動コントロールの改善、一語文は変化しないが内容が豊富になるなどの質の改善が T-CLAC では表われない。

症例 3 などにみられる視覚—運動系と聴覚—言

語系の発達差が著しい状態がプロフィールから明白にされない。

症例 2 などにみられるような受身的な応答(言語及びその他の行動面)に限定され、積極的な状態に適合した自発的な反応についての評価が明白でない。

以上のような問題点が具体的な症例について吟味していくと、指摘される。

3) T-CLAC の使用上の留意点

T-CLAC はあくまでも大ざっぱな状態把握に限定して用いていくものであることを念頭におく必要がある。したがって、治療教育において重要性をもつ「わずかな変化」「質的な変化」「同じレベルでの広がり」は別個に観察され、記録され、展開を促進していかななければならない。

次に、T-CLAC のねらいは小学校入学時までに第 5 段階までの改善をもたらしたいという点から構成されたものであり、学齢期の普通学級に在籍する自閉症児を対象とした場合、無理な点がでてくる。また、自閉症状は顕著であるが、中核となる問題は、失語症、知能障害などの他の問題である場合の妥当性は低下する。

したがって、T-CLAC の特徴を前提とし改善を考えるならば、24項目に副項目を導入し、5段階にこだわらず中間の評価、すなわち、3と評価したが内容からみて 3.5 が適当という項目については積極的に中間の評価を導入してもよいのではないかと考える。

注 1 この症例の音声模倣訓練に関しては、小林ら(1977)が報告している。

注 2 この症例の数の学習に関しては、秋田ら(1977)が報告している。

参 考 文 献

- 1) 秋田律子・小林重雄・斉藤瑛(1977): 自閉症児の普通学級への適応訓練—教の概念学習を中心として—。行動療法研究, 2, 100—108.
- 2) 小林重雄(1973): 自閉症の診断に関する行動療法的考察。山形大学紀要(教育科学), 5, 345—362.
- 3) 小林重雄(1976): いわゆる自閉症児の症状形成に関する考察。東京教育大学教育学部紀要, 22, 145—151.
- 4) 小林重雄・杉山雅彦(1977): 自閉症幼児の音声模倣訓練に関する検討—発語困難児について—。心身障害学研究, 1, 83—89.

Summary

The study on therapeutic process of autistic children (2)

—Following them by means of T-CLAC—

HIROKO IKE SHIGEO KOBAYASHI

CHIZUKO OHTA KENJI ITOH

In the study, the autistic children who has been treating therapeutically at University of Tsukuba and Tokyo University of Education were picked up in order to discuss the modification process of autistic syndrome. T-CLAC, which was partially modified Y-CLAC, was used for checking autistic syndrome on 24 items, evaluated 5 grades respectively.

Method

Subjects : 6 autistic children (ages at intake : 3 : 8—7 : 1)

Procedure : All subjects have been introduced in the therapeutic program based on behavior therapy. They were administered T-CLAC at least three times on process of therapeutic approach.

Results (case study)

The following 6 cases were briefly described on proceeding of therapeutic approach. The results were figured out on the profile of T-CLAC (ref. Fig. 2—Fig. 7).

Case 1 H. M.

Diagnosis : Autistic.

Intake : Sep., 1975. 3 ys. 8 mos.. Almost no vocalization and distractiveness.

Process of training (Sep., 1975—Apr., 1976) : Extinguishing of inadequate behaviors. Increasing of frequency in vocalization.

Process of training (May, 1976—Mar., 1977) : Discrimination training of colors, forms and objects. Training of sensory-motor coordination.

Case 2 H. H.

Diagnosis : Autistic.

Intake : Sep., 1975. 3 ys. 9 mos.. Maladjustment in kindergarten class. No spontaneous speech except commercial phrases.

Process of training (Sep., 1975—Mar., 1977) : Discrimination training of colors, forms and objects. Training of picture-puzzle and drawing a person. Imitating a variety of actions and ball exercising.

Process of training (Apr., 1977—Sep., 1977) : Tracing and copying of words and reading of Hiragana and Katakana. Sorting of multiple dimensions. Acquiring of the fundamental number concept.

Case 3 M. I.

Diagnosis : Developmental sensory aphasia with autistic syndrome.

Intake : Oct., 1975. 4 ys. 8 mos.. Only few tense vocalizations.

Process of training (Oct., 1975—Nov., 1976) : Establishing of learning set. Discrimination

training of objects by word letters (inability of verbal instruction). Decreasing of tense vocalizations and increasing of vocalizations as babbling.

Process of training (Dec., 1976—Jul., 1977) : Naming of objects by letters (about 15 objects). Imitating of sounds (about 10 syllables).

Case 4 T. S.

Diagnosis : Autistic.

Intake : Jun., 1976. 4 ys. 9 mos.. Maladjustment in kindergarten class. Inability to follow the instructions.

Process of training (Jun., 1976—Mar., 1977) : Discrimination training of colors, forms and size respectively. Training of sensory-motor coordination.

Process of training (Apr., 1977—Sep., 1977) : Acquiring of number concept and exercising the simple type of addition and subtraction. Tracing and copying of words and reading of the sentences.

Case 5 H. K.

Diagnosis : Autistic.

Intake : May, 1976. 6 ys.. Retardation in speech and language development.

Process of training (May, 1976—Feb., 1977) : Training with comprehension of picture card. Training of verbal imitation. Training of sensory-motor coordination.

Process of training (Mar., 1977—Jul., 1977) : Same training with the prior stage.

Case 6 N. K.

Diagnosis : Autistic.

Intake : May, 1975. 7 ys. 1 mo.. Hyperactive, destructive and distractive. Echolalic verbalization.

Process of training (May, 1975—May, 1976) : Extinguishing of inadequate behaviors. Learning of arithmetic reasoning (number treating), speaking and writing.

Process of training (Apr., 1976—Apr., 1977) : Acquiring of conversation ability. Training of practical application of number concept. Making a variety of objects expressed on drawing.

Discussion

It were demonstrated the profile of T-CLAC were changed gradually in accordance with modification of autistic syndrome. It was also pointed out T-CLAC was roughly scaled so that some slight modifications and qualitative change in behaviors of autistics were neglected on the scales.